

実践経験をほとんど持たない初期キャリア研究者の困難と工夫

○ 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程 氏名 松本大樹 (会員番号: 010403)

キーワード: 距離、強み、鳥の目

1. 発表者の現状

発表者は「生活保護意識にメディアの描く利用者像が与える影響」というテーマで研究を行っている。現在は、過去の新聞報道における生活保護利用者の描かれ方を分析するとともに、メディア報道のタイプの相違が生活保護意識に与える影響を明らかにすることを目的として、修士論文を執筆中である。

発表者は日本福祉大学の学部を卒業し、その後すぐに日本福祉大学大学院の修士課程へ進んだ身である。そのため、実践での経験というものが無いに等しい。修士課程に進むと、以前にも増して現場で活躍する方々とお会いする機会が増えた。そうした方々は現場での経験に根ざした問題意識を持っており、発表者は実践の経験が持つ説得力を痛感した。

社会福祉研究の究極の目標は、実践を志向するものでなければならない(太田 1992:60)。つまり、現場を意識し続ける必要があるということである。しかし、実践現場での経験がほとんど無い発表者にとって、現場を意識するということは容易ではなく、大きな課題である。そして、それは実践と研究の循環を志すうえでも障壁となっている。これらの現状をふまえ、感じている困難とそれに対して行っている工夫を共有する。

2. 実践経験が少ないことによる困難

社会福祉学というものは実践を伴う学問であり、その実践を科学的に行わしめる学問である(高田 2001:13)。そのため、実践経験が少ないことは様々な困難を生じさせる。ここでは発表者が感じた困難について3点挙げる。

1) 現場と距離が離れている

現場との関わりが少ないため、現場の方と意見を交わす機会が少なく、協働することが難しい。現場から離れているため、当事者や支援者などといった「現場にいる人」を意識することが少なくなってしまう。

2) 実践経験に基づかないため、考えが抽象的になる

研究のテーマが実践経験に基づいていないため、どうしても問題意識の具体性に欠ける部分が出てくる。具体性がないために、自らのやっていることが役に立つのか、関心を持ってもらえるものなのかと不安になってしまう。また、抽象的な問題意識に基づいた内容を扱うことから、研究に対する熱量を保つことができず、注意が散漫になってしまうことがある。

3) 実践経験が少ないということが劣等感につながる

実践経験が少ないために自信が持てず、引け目を感じてしまうことがある。人に伝えられるわかりやすい強みがないということは特に初期キャリア研究者にとっては当てはまる内容なのではないかと思う。そのうえ、実践の経験も少ないとなると、自分の中の武器が見いだせず、自分の価値を見失ってしまうことにつながる。

3. 困難を解消するための工夫

上記で挙げたように、現場との接点や、個人的な心持ちという面での困難が生じている。以下では、それらに対処すべく行っている工夫について述べる。

1) 学会や研究会への参加

実践経験が少ない中で、現場で活躍されている方の話を聴く機会には大きな意味を持つと感じている。学会や研究会には現場で活躍されている方々も多く参加されており、そうした場に足を運ぶことによって、有益な情報やつながりを得ることができる。また、そうした場では自らの研究や現状について話を聴いていただける機会もあり、そこでいただくコメントなどを通し、自分の立ち位置を確認することもできる。

2) 作品やドキュメンタリー番組に触れる

漫画やドラマ、映画などといった作品や、ドキュメンタリー番組に触れ、実践の場の空気を疑似体験することは、現場を意識するうえで有用であると考えられる。しかし、そうしたものには、過剰な表現や、実際と異なる部分があるかもしれない。そのため、それらの内容を鵜呑みにすることは好ましくないだろう。ただ、作品等の内容が実際と異なっている場合であっても、見る必要が無いとはいえない。なぜなら、世間においては、そうした作品等を通して現場の様子が伝わっている可能性が高いと考えられるからである。それならば、そうした作品等に触れることで、現場にいない人々が抱くと考えられる現場へのイメージをつかむことが、世間がとらえる社会福祉を考えるうえで重要になるだろう。現場での実践経験が少ないからこそ、現場を知らない視点からの感覚を有している点に焦点を当てることが必要だと考える。

3) 実践経験が少ないこと自体を強みととらえる

実戦経験が少ないということが劣等感につながると前述したが、そうした状況は強みにもなり得ると考える。北川（2023：101）は、実務家が自ら携わっている分野を研究対象とする場合は、主観が妨げになる危険性があることを痛感すると述べている。主観は感情と強く結び付くと考えられるため、研究を継続していくうえでの意欲につながる重要なものであるといえるだろう。しかし、この主観から生まれるこだわりなどが妨げとなってしまう場合も考えられる。主観が妨げになる危険性をふまえ、北川（2023：101）は、全体を俯瞰する「鳥の目」に留意していると述べている。この「鳥の目」こそ、実践経験の少ない者の強みになり得ると考える。現場にいないと見えないものもあるが、現場にいないからこそ見えるものもあるはずである。実践経験が少ないからこそ有している強みを現場にどのように活かしていくことができるのか、それについて考えることが実践と研究の循環につながると考える。

【参考文献】

- 北川公啓（2023）「研究と現場における3つの視点の大切さ—客観的かつ学問的であるために—」『日本地域政策研究』30（0）、100-101.
- 太田義弘（1992）『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 高田眞治（2001）「社会福祉実践研究の到達水準と展望—福祉政策の外圧と実践要素具象化の内発性—」『社会福祉研究』（80）、13-19.